

## 対人関係におけるコミットメントに影響を及ぼす要因(2)

著者	中村 祥子
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	51
ページ	39-50
発行年	2014
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00007299/">http://id.nii.ac.jp/1060/00007299/</a>

## 対人関係におけるコミットメントに 影響を及ぼす要因 (2)

社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程3年

中村 祥子

### 要旨

本研究は対人関係のコミットメントに影響を及ぼす要因について、相互依存性理論 (Kelley & Thibaut, 1978) と自己拡張理論 (Aron, Aron, Tudor, & Nelson, 1991) に基づいて検討した。大学生216名を対象とした調査をおこない、そのうち恋愛関係のパートナーがいる48名について分析をおこなった。パス解析の結果、自己拡張と関係における成果がコミットメントに対して正の影響を示し、成果を媒介とした自己拡張からコミットメントに対する間接効果が示された。この間接効果は自己拡張からコミットメントに対する直接効果よりも強い影響を示した。親密な関係の成果の獲得とコミットメントの促進において、自己拡張の過程がどのように関連するかについて議論をおこなった。

キーワード：対人関係、コミットメント、相互依存性理論、自己拡張理論、関係の成果

### 問題

対人関係研究においては、人と人が関わり合いを持ち、その関係が続いていく過程にはコミットメントが関連すると考えられている。コミットメントとは、対人関係において個人が他者との関係に関与し、その関係を継続しようとする意図として捉えられ (e.g., Arriaga, Reed, Goodfriend, & Agnew, 2006; Jhonson, 1991; Rusbult, 1983)、対人関係を安定させたり、関係の存続を予測したりする機能を持つことが示されている (Rusbult, Agnew, & Arriaga, 2012)。本研究は、中村 (2012) のコミットメントの規定因についての議論をもとに、対人関係における成果と自己拡張がコミットメントに及ぼす影響について検討をおこなった。

成果とは、相互依存性理論の流れを汲む対人関係研究において扱われる概念であり、対人関係の相互作用の結果として得られたものを指し、相互作用で生じた報酬とコストの差し引きによって定義される (Kelley & Thibaut, 1978 黒川監訳 1995)。先行研究では、関係の成

果によってコミットメントが高められることが示されている（e.g., 中村, 1990, 1991; Rusbult, 1980, 1983; 和田・山口, 1999）。他方で、自己拡張とは、Aron et al. (1991) によって人の基本的な動機の1つとして提唱された。人は親密な対人関係において相手の持つ資源を認知的に自分自身のものとして知覚することで自己が拡張し、個人の自己効力感や自尊感情が高まるとされる。自己拡張は親密な関係におけるコミットメントと高い関連性を持つことが示されている（Agnew, Van Lange, Rusbult, & Langston, 1998）。中村（2012）は、これら対人関係の成果と自己拡張の観点から、コミットメントの規定因について、人は他者からの資源の獲得を通じて自己拡張をおこなうために対人関係における成果を求め、自己拡張は獲得した成果に対する知覚に影響を及ぼすことで関係のコミットメントの影響する要因に成り得ると論じた。つまり、成果を媒介して自己拡張はコミットメントを規定する可能性が考えられる。本研究は恋愛関係を対象に、中村（2012）の議論についてデータによる検証をおこなった。

本研究は恋愛関係の成果の測定に社会的交換理論の概念を用いた。社会的交換理論とは、報酬やコストなどの経済学的概念を用いて対人的相互作用を資源の交換として説明する理論体系である。社会的交換の概念は相互依存性理論にも援用され、相互作用の測定に際して社会的交換の概念に基づく変数が用いられる。親密な関係における社会的交換を扱った国内の先行研究では、主に「投入（Input）」「成果（Outcome）」「選択比較水準（Comparison level for alternatives）」の3つの変数が用いられている（e.g., 相澤, 2003; 赤澤, 2005; 中村, 1990, 1991; 和田・山口, 1999）。「投入」とは交換において与えたもの、「成果」とは交換において得たものを指す。国内の先行研究では、関係において交換される資源を「貢献」と設定し、自分あるいは他者がおこなった関係に対する貢献の程度が測定された。「選択比較水準」とは、複数の対象との交換から得られる可能性のある成果を比較した場合の最低水準を指す（Kelley & Thibaut, 1978 黒川監訳 1995）。例えば、他者Aと他者Bそれぞれから得られる成果を比較して、他者Aからの成果が大きい場合、他者Bの成果は選択比較水準を下回ることになり、その結果個人は他者Bとの関係性を継続しなくなる。選択比較水準における比較では、上記の例のように複数の他者から得られる成果を比較するだけでなく、特定の対象との交換を継続した場合と終了した場合の成果を比較することも含まれる。国内の先行研究における選択比較水準は、友人以外の関係性との比較（相澤, 2003; 中村, 1990）、友人関係をやめること（相澤, 2003）、恋人以外の他者との関係性との比較（中村, 1991; 和田・山口, 1999）、理想的な配偶者像との比較（赤澤, 2005）などが設定された。本研究では、国内の先行研究と同様に「投入」「成果」「選択比較水準」の3変数を用いた。また、成果をより具体的に捉えるために、交換される資源を「物質的・精神的なもの」とし、選択比較水準は「恋人と恋人以外の他者との関係性の比較」および「恋人と恋人以外の他者それぞれから得られる成果の比較」とした。

以上を踏まえ、本研究では恋愛関係のコミットメントについて、関係における成果を媒介して自己拡張がコミットメントを促進するかに着目して検討を行うことを目的とする。

## 方法

### 調査回答者

都内の2つの大学において講義時間内に集合調査形式で調査を実施し、大学生216名から回答を得た。調査実施時期は2011年12月であった。回答者全体216名の内、欠損値のあった回答を除外し、現在交際中の恋人がいる回答者を分析対象者とした。分析対象者は48名（男性18名、女性30名、平均年齢19.79歳（ $SD = 1.35$ ）、調査回答者全体の22%）であった。

### 調査内容

回答者には初めに、年齢、性別、交際相手の有無について回答を求めた。以降の質問には、交際相手の有無によって回答者にはそれぞれ異なる回答方法を指示した。現在交際中の恋人がいる場合には、以降の質問項目には恋人との関係と、現在最も親しい同性友人との関係、両方について回答するよう指示した。恋人と同性友人についての回答順序はカウンターバランスをとった。恋人がいない場合には、以降の質問項目には最も親しい同性友人との関係について回答するよう指示した。以上の手続きを経て、回答者には以降に続く質問項目に回答を求めた。

#### 関係における社会的交換の項目

社会的交換の3つの変数「投入」「成果」「選択比較水準」をもとに作成した、「自己投入」「他者投入」「自己成果」「他者成果」「選択比較水準」を測定する全20項目について、7件法で評定を求めた（1 = “まったく当てはまらない”、4 = “どちらともいえない”、7 = “非常に当てはまる”）。質問項目はRusbult（1983）、中村（1990, 1991）、相澤（2003）を参考に作成した。回答する際に、質問文の「〇〇さん」の部分恋人と同性友人それぞれの名前に置き換えて回答するよう指示した。

#### 関係満足感と関係コミットメントの項目

関係満足感と関係コミットメントを測定する各7項目、全14項目について、7件法で評定を求めた（1 = “まったく当てはまらない”、4 = “どちらともいえない”、7 = “非常に当てはまる”）。項目はRusbult, Martz, & Agnew（1998）、中村（1991）、黒川・吉田（2006）、金政・大坊（2003）を参考に作成した。回答方法は先述の社会的交換の項目と同様に、質問文の「〇〇さん」の部分恋人と同性友人それぞれの名前に置き換えて回答するよう指示した。

### Inclusion of Other in the Self Scale (IOS Scale) の項目

恋愛関係における自己拡張の程度を測定するため、Aron, Aron, & Smollan (1992) の IOS Scaleを使用した。IOS Scaleは、2つの円が次第に重なりあっていく様子を7段階の図で示し、自分と相手との関係に最も当てはまる図を選択して回答する尺度である。本研究では、7つの図から1つ選択するように指示し、最低1点から最大7点のIOS得点とした。

これらの質問項目の他に、恋人と同性友人に対して期待することについて自由記述での回答を求めたが、本研究での分析からは除外した。また、本研究では現在交際相手がいる回答者の恋愛関係についての回答のみを分析対象とし、友人関係についての回答は分析から除外した。

## 結果

### 関係における社会的交換の項目の因子分析

天井効果 ( $M+SD \geq 7$ ) が見られた2つの項目を除外し、残りの18項目で主因子法promax回転による因子分析をおこなった。「自己投入」「他者投入」「自己成果」「他者成果」「選択比較水準」、以上の5つ要素を反映させて作成した項目であったため5因子での検討を試みたが、5因子構造は得られなかった。そこで、探索的に因子分析をおこなった。

初期の固有値の減衰状況は7.19、2.13、1.40、1.02、0.94・・・であり、因子の解釈可能性から2因子と判断し、再度、主因子法promax回転による因子分析をおこなった。因子負荷量0.35以下の項目を除外し、最終的に2因子構造16項目が得られた。累積寄与率は50.73%であった。因子分析の結果を信頼性係数 ( $\alpha$  係数) とともに表1に示す。

第1因子は、関係性や成果について恋人と恋人以外の他者との比較をおこなう選択比較水準の項目と、恋人の希望をかなえたり自分の希望を恋人にかなえてもらったりという「精神的なもの」についての自己と他者の「投入」と「成果」の項目から構成されていたため、「関係成果」とした。第2因子は、お金・物・時間・労力をどれだけ費やしたかという「物質的なもの」に関する自己と他者の「投入」と「成果」の項目で構成されていたことから、「物質的交換」とした。この2因子構造の尺度を「社会的交換尺度」とし、下位尺度ごとに項目の数値の合計を項目数で除した合成得点を算出し、それぞれ関係成果得点と物質的交換得点とした。

表1 関係における社会的交換の項目の因子分析結果 (主因子法promax回転)

	項目	F1	F2	共通性	M	SD
第1因子「関係成果」(α=.89)						
5. Cl	〇〇さん以外の人達から得られるものよりも、〇〇さんから得られるもののほうが多い	.88	-.26	.58	4.83	1.43
16. Cl	私と〇〇さんの関係は、〇〇さん以外の人達との関係よりも良い関係だ	.82	.07	.75	5.50	1.37
11. Cl	〇〇さん以外の人達と一緒にいるよりも、〇〇さんと一緒にいるほうが私の希望がかなう	.80	-.05	.59	5.13	1.33
14. Os	私は〇〇さんと一緒にいると、自分の希望することがかなう	.75	-.16	.46	5.23	1.02
2. Io	〇〇さんは私のために、〇〇さんの時間や労力を費やしている	.62	.09	.46	5.23	1.34
4. Oo	〇〇さんは私と一緒にいると、〇〇さんの希望することがかなう	.62	.05	.41	4.75	1.10
18. Io	〇〇さんは、私の希望することをかなえる努力をしている	.60	.17	.50	5.00	1.38
15. Is	私は〇〇さんのために、自分の時間や労力を費やしている	.49	.29	.48	4.88	1.16
6. Is	私は、〇〇さんの希望することをかなえる努力をしている	.38	.20	.27	5.29	0.99
第2因子「物質的交換」(α=.87)						
3. Is	私は〇〇さんに、お金や物などの物質的なものを与えている	-.18	.91	.67	4.42	1.65
10. Oo	〇〇さんは私から、お金や物などの物質的なものを得ている	-.24	.87	.59	4.15	1.60
19. Os	私は〇〇さんから、お金や物などの物質的なものを得ている	.18	.70	.65	4.13	1.66
17. Io	〇〇さんは私に、お金や物などの物質的なものを与えている	.24	.67	.68	4.42	1.49
13. Oo	〇〇さんは私から、時間や労力を使ってなにかをしてもらっている	-.05	.58	.31	4.71	1.07
8. Os	私は〇〇さんから、時間や労力を使ってなにかをしてもらっている	.29	.53	.52	5.31	1.40
20. Oo	〇〇さんは私から、思いやりや安心感などの精神的なものを得ている	.15	.35	.20	5.46	1.09
注) 項目のアルファベット		因子寄与	6.43	1.69	(N=48)	
Is: 自己投入 Os: 自己成果 Io: 他者投入		寄与率 (%)	40.17	10.56		
Oo: 他者成果 Cl: 選択比較水準		因子間相関	.55			

### 関係満足感と関係コミットメントの項目の因子分析

関係満足感と関係コミットメントの項目のうち、天井効果の見られた6項目を除外し、残り8項目について主因子法promax回転による因子分析をおこなったところ、関係満足感と関係コミットメントの両項目を併せた1因子構造が確認された。信頼性は $\alpha = .91$ であり、内的



一貫性が高いことが示された。全8項目中5項目が関係満足感の項目として作成したものであったが、項目全体の内容から、相手との関係への関与を重視するコミットメントの概念に当てはまると判断したため、以降の分析ではこれらを「関係コミットメント尺度」として扱った。因子分析の結果を表2に示す。これらの全8項目の数値の合計を項目数で除し、コミットメント得点を算出した。

表2 関係満足感と関係コミットメント項目の因子分析結果（主因子法promax回転）

項目	F1	共通性	<i>M</i>	<i>SD</i>
3. s 私と〇〇さんは理想的な関係だと思う	.91	.84	5.63	1.14
5. s 私と〇〇さんはお互いを理解しあえる	.86	.75	5.48	1.24
6. c 私は〇〇さんに強いつながりを感じる	.86	.73	5.65	1.18
4. c 私と〇〇さんの関係は長続きすると思う	.84	.70	5.85	1.01
7. s 私は〇〇さんとの関係に満足している	.80	.63	5.60	1.27
11. s 〇〇さんと一緒にいると有意義な時間がすごせる	.66	.43	5.88	1.06
13. s 私は〇〇さんと気が合う	.64	.42	5.88	1.10
8. c 私は〇〇さんとの関係に責任がある	.48	.23	5.08	1.33

( $\alpha = .91$ )

注) 項目のアルファベット 累積寄与率 (%) 59.04 ( $N = 48$ )  
s : 関係満足感 c : 関係コミットメント

#### 各変数の記述統計量および相関と偏相関

社会的交換尺度、関係コミットメント尺度、IOS Scaleによって求められた4つの変数の記述統計量と、各変数について性別を独立変数とした $t$ 検定の結果を表3に示す。 $t$ 検定の結果、各変数において性別による数値の差はないと確認されたため ( $ps > .10$ )、以降の分析は分析対象者全体48名のデータを用いた。

4つの変数の相関を求めた結果を表4に示す。また、社会的交換尺度の2変数間の因子間相関が高かったため、関係成果と物質的交換をそれぞれ抑制した場合の偏相関を求めた結果を表5に示す。4つの変数はすべて中程度以上の相関 ( $r_s = .36 \sim .79$ ) が示されていたが、関係成果の影響を抑制した場合、物質的交換は他の変数との相関が見られなくなった。従って、IOSとコミットメントについての社会的交換2変数それぞれの相関関係は、関係成果は高い相関を示し、物質的交換は疑似相関であることが示された。

表3 各変数の平均値と標準偏差および性別についての $t$ 検定の結果

	関係成果	物質的交換	コミットメント	IOS
全体 ( $N=48$ )	5.09 (0.91)	4.65 (1.07)	5.63 (0.92)	5.13 (1.47)
男性 ( $N=18$ )	4.94 (1.19)	4.40 (1.11)	5.68 (1.04)	4.94 (1.59)
女性 ( $N=30$ )	5.19 (0.69)	4.80 (1.04)	5.60 (0.86)	5.23 (1.41)
$t$ (df)	0.91 (46)	1.26 (46)	0.29 (46)	0.66 (46)

表4 各変数の相関

	関係成果	物質的交換	コミットメント	IOS
関係成果	—			
物質的交換	.56***	—		
コミットメント	.79***	.46**	—	
IOS	.67***	.36**	.71***	—

\*\*\* $p<.001$  \*\* $p<.01$  \* $p<.05$  (N=48)

表5 社会的交換の2変数をそれぞれ抑制した場合の各変数の偏相関

	関係成果	物質的交換	コミットメント	IOS
関係成果	—	—	.72***	.60***
物質的交換	—	—	—	—
コミットメント	—	.04	—	.66***
IOS	—	-.02	.40**	—

\*\*\* $p<.001$  \*\* $p<.01$  (N=48)

注) 上段：物質的交換を抑制 下段：関係成果を抑制

### 自己拡張と成果がコミットメントに及ぼす影響についてのパス解析

自己拡張が成果を媒介して関係のコミットメントに及ぼす影響について検討するため、共分散構造分析によるパス解析をおこなった。まず、分析に用いる変数を次の3つの水準に整理した。第1水準はIOS、第2水準は社会的交換の2変数である関係成果と物質的交換、第3水準はコミットメントであった。これらの3つの水準について、(1) 第1水準と第2水準を説明変数、第3水準を基準変数としたパス、(2) 第1水準を説明変数、第2水準を基準変数としたパス、(3) 第2水準の2変数がいずれも社会的交換尺度の下位尺度得点であることから、2変数の共変関係を検討するパス、以上の3種類のパスを設定して解析をおこなった。その後、有意にならなかったパスを削除し、最終的なモデルの適合度を求めた。パス解析の結果を図1に示す。図のパス係数は、直線矢印上の数値が標準偏回帰係数、曲線矢印上の数値が相関係数を示す。

解析の結果、(1) コミットメントに対するIOSと関係成果からのパス、(2) 関係成果および物質的交換に対するIOSからのパス、(3) 関係成果と物質的交換の共変関係のパスが、そ



それぞれ有意であった。コミットメントはIOSと関係成果の両方に規定されることが示された。また、関係成果を媒介したIOSからコミットメントへの間接効果が見られた。間接効果の値（IOSから関係成果へのパス、関係成果からコミットメントへのパス、それぞれのパス係数の積の値）を求めたところ、IOSからコミットメントへの直接効果（ $\beta = 0.34$ ）に比べ、間接効果（ $\beta = 0.37$ ）のほうが大きいことが示された。

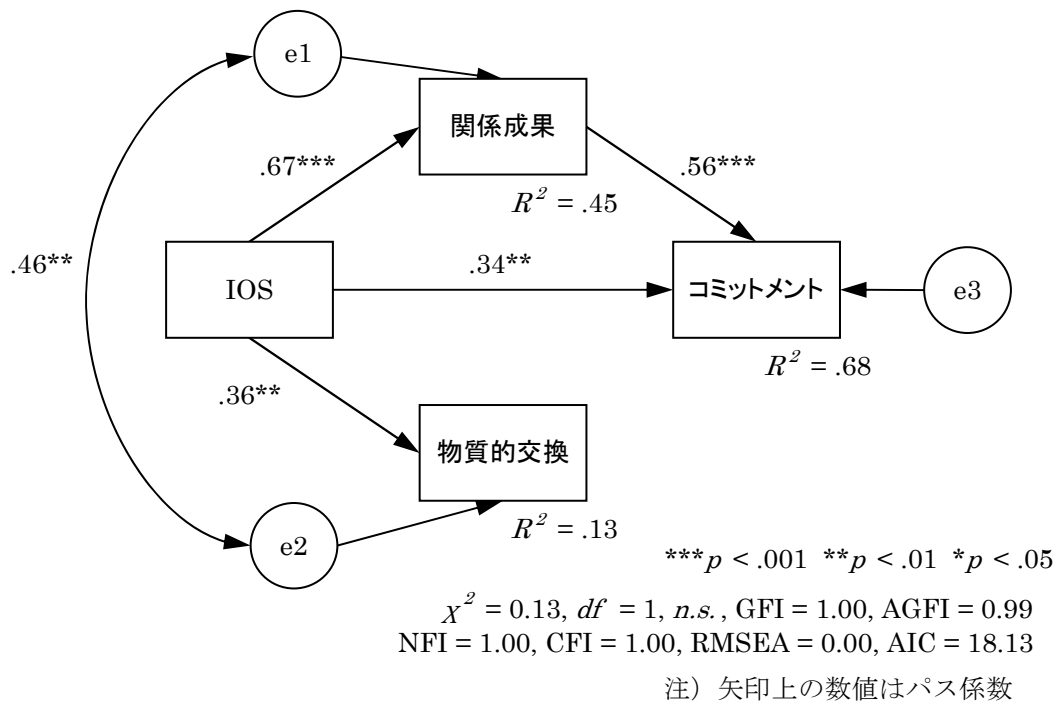


図1 IOSと社会的交換がコミットメントに及ぼす影響についてのパス解析の結果

## 考察

本研究は恋愛関係のコミットメントについて、関係における成果と自己拡張が及ぼす影響を検討した。その結果、関係における成果を媒介して自己拡張がコミットメントを高めることが示された。親密な関係の成果とコミットメントの促進における自己拡張の機能について以下に論じる。

本研究は関係における成果の測定に社会的交換の概念を用いた。因子分析の結果、本研究で作成した社会的交換尺度の第1因子は、選択比較水準の項目の負荷が最も大きく、次いで「精神的なもの」についての自己と他者の「投入」と「成果」の項目に負荷が見られた。交換される資源の観点からいえば、第1因子はいわば精神的交換であり、第2因子は物質的交換である。しかし、第1因子の内容を考慮すると恋愛関係では交換する資源の内容よりも、交換をおこなう相手が重視されたと考えられる。また、本研究の分析対象となった恋愛関係の回答者数は調査回答者全体の22%であり、恋愛関係は誰もが持ち得るような一般的な関係ではなく、恋人がいること自体が希少価値を持つと考えられる。また、関係コミットメント尺

度の回答では天井効果が見られ、分析から除外した質問項目の回答内容の多くは7件法の評定値7を選択するような高い評定となっていた。こうした結果から、恋愛関係においては恋人がいること自体がポジティブな価値を持ち、恋愛関係そのものが関係から得られる「成果」として捉えられていると考えられる。

恋愛関係そのものが成果であることは、自己拡張が成果を媒介してコミットメントを促進する過程において重要な意味を持つと考えられる。パス解析の結果、IOSから社会的交換の2変数である関係成果と物質的交換へのパスが有意であったが、IOSからコミットメントへの媒介過程の変数と成り得たのは関係成果のみであった。自己拡張は他者の資源を認知的に獲得することによって個人の自己効力感や自尊感情を高めるものである。特定の他者との親密な関係を得ることは、すなわち他者の優れた特性を認知的に獲得する機会を得ることであり、物質的な資源を得ることに比べると、より自己拡張動機にかなうものであろう。

本研究の結果は、自己拡張動機にかなう成果を得られる関係に対して、コミットメントが促進されたことを示していると考えられる。また、本研究では扱っていないため確認はできないが、恋愛関係のようなポジティブな価値のある関係性を持つことは、おそらく個人の自尊感情や自己効力感にも影響を及ぼすだろう。

### 本研究の問題点

本研究が分析対象としたデータは、社会的交換尺度の回答項目に欠損値が多く見られた。欠損値の多さは質問項目の回答しづらさに起因していると考えられる。回答しづらさについては、単純に質問項目の抽象的な文章表現が理由の1つと考えられるが、もう1つの理由として、回答者は恋人との関係を社会的交換の視点で捉えていなかったのではないかと考えられる。例えば、夫婦関係の社会的交換を検討した赤澤（2005）は、夫婦間での資源交換の状況として「家事」「子育て」「収入を得る仕事」をあげ、夫婦それぞれの貢献の程度を測定した。夫婦関係に比べて恋愛関係では、互いに果たすべき役割や取り組むべき課題が明確ではないため、自分と恋人それぞれの貢献の程度が問題になる状況は少なく、社会的交換の視点から関係を捉える機会もまた少ないと考えられる。また、自己と他者のどちらがどれだけ「投入」し、「成果」を得たか、他の対象と比べて望みどおりの成果を得られているか、といった社会的交換の視点は、一見「損得勘定」のようにも捉えられ、個人によってはネガティブに受け止める場合もあるだろう。先述したような恋愛関係に対するポジティブな価値の付与があると仮定すれば、そのようなネガティブな社会的交換の視点を恋愛関係に取り入れることは阻害されている可能性も考えられる。おそらくは、恋人との関係において何らかのネガティブな出来事や著しい不公平が生じるなど、恋愛関係のポジティブな価値が損なわれない限りは、社会的交換の視点で恋愛関係を捉えることはないと思われる。

また、本研究で測定されたコミットメントは、恋愛関係の満足度の指標とコミットメン

トの指標が混在したものとなった。コミットメントは関係に対する関与と継続の意思であるため、満足感とは異なる概念である。満足感とコミットメントの質問項目の多くに天井効果が見られたため、天井効果の項目を除外した残りの項目を改めてコミットメントの指標として採用したが、本研究で測定されたコミットメントが恋愛関係のコミットメントの指標として妥当であったかについては考慮すべきである。

## 引用文献

- Agnew, C. R., Van Lange, P. A. M., Rusbult, C. E., & Langston, C. A. (1998). Cognitive interdependence: Commitment and the mental representation of close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 939-954.
- 相澤寛史 (2003). 同性友人関係における投資モデルの精緻化 実験社会心理学研究, **42**, 131-145.
- 赤澤淳子 (2005). 夫婦の関係満足度および生活充実感における規定因の検討 社会心理学研究, **21**, 147-159.
- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 596-612.
- Aron, A., Aron, E. N., Tudor, M. & Nelson, G. (1991). Close relationships as including other in the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 241-253.
- Arriaga, X. B., Reed, J. T., Goodfriend, W., & Agnew, C. R. (2006). Relationship perceptions and persistence: Do fluctuations in perceived partner commitment undermine dating relationships? *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 1045-1065.
- Johnson, M. E. (1991). Commitment to personal relationships. *Advances in Personal Relationships*, **3**, 117-143.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係 感情心理学研究, **10**, 11-24.
- Kelley, H. H., & Thibaut, J. W. (1978). *Interpersonal Relations: A theory of interdependence*. New York: Wiley. (H. H. ケリー・J. W. ティボー 黒川正流 (監訳) (1995). 対人関係論 誠信書房)
- 黒川雅幸・吉田俊和 (2006). 個人-集団間の役割期待遂行度が仲間集団関係満足感に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **45**, 111-121.
- 中村雅彦 (1990). 大学生の友人関係の発展過程に関する研究——関係関与性を予測する社会的交換モデルの比較検討——社会心理学研究, **5**, 29-41.
- 中村雅彦 (1991). 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, **31**, 132-146.
- 中村祥子 (2012). 対人関係におけるコミットメントに影響を及ぼす要因: 研究ノート 東洋大学大学院紀要 社会学研究科・福祉社会学デザイン研究科, **49**, 73-81.

- Rusbult, C. E. (1980). Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of the investment model. *Journal of Experimental Social Psychology*, **16**, 172-186.
- Rusbult, C. E. (1983). A longitudinal test of the investment model: The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 101-117.
- Rusbult, C. E., Agnew, C. R., & Arriaga, X. B. (2012). The investment model of commitment processes. In P. A. M. Van Lange, A. W. Kruglanski, & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of theories of social psychology*. Vol. 2. Los Angeles: Sage, pp.218-231.
- 和田実・山口雅敏 (1999). 恋愛関係における社会的交換モデルの比較: カップル単位の分析 社会心理学研究, **15**, 125-136.

## **Factors affecting on the commitment to the interpersonal relationships (2)**

NAKAMURA, Sachiko

This study examined factors affecting the commitment to interpersonal relationships, based on the interdependence theory (Kelley & Thibaut, 1978) and the self-expansion model (Aron, Aron, Tudor, & Nelson, 1991). A survey was conducted among 216 university students, collecting data for analysis from 48 respondents who had romantic partners. The result of path analysis showed that self-expansion and relationship outcome had positive effects on commitment, and self-expansion has indirect effect on commitment via relationship outcome. This indirect effect was greater than its direct effect of the self-expansion to the commitment. Finally, it was discussed how the self-expansion process might be related to acquiring the outcome and facilitating the commitment in intimate relationships.

**Key words :** interpersonal relationship, commitment, interdependence theory,  
self-expansion model, relationship outcome